

## 三井物産株式会社

## 定時株主総会招集ご通知に際してのインターネット開示事項

## 事業報告

新株予約権等の状況	1
会計監査人の状況	2
業務の適正を確保するために必要な体制及び当該体制の運用状況	3

## 連結計算書類

連結持分変動計算書	7
連結包括利益計算書(ご参考)	8
セグメント情報(ご参考)	9
連結注記表	10

## 計算書類

株主資本等変動計算書	16
個別注記表	18

本記載事項((ご参考)を除く)は、監査役及び会計監査人が監査報告を作成する際に行った監査の対象に含まれています。

新株予約権等の状況

1. 当連結会計年度の末日に当社役員等が有する職務執行の対価として交付された新株予約権等の内容の概要

(1)取締役、監査役及び執行役員が保有する新株予約権

発行年 (発行決議日)	新株予約権の数	目的である株式の 種類及び数	発行価額	行使に際して出資 される財産の価額	行使期間
2015年3月期 (2014年7月4日)	744 個	普通株式 74,400 株	無償	1株当たり1円	2017年7月28日から 2044年7月27日
2016年3月期 (2015年5月8日)	68 個	普通株式 6,800 株	無償	1株当たり1円	2018年5月28日から 2045年5月27日
2016年3月期 (2015年7月8日)	861 個	普通株式 86,100 株	無償	1株当たり1円	2018年7月28日から 2045年7月27日
2017年3月期 (2016年7月13日)	2,365 個	普通株式 236,500 株	無償	1株当たり1円	2019年7月29日から 2046年7月28日
2018年3月期 (2017年7月5日)	2,819 個	普通株式 281,900 株	無償	1株当たり1円	2020年7月20日から 2047年7月19日
2019年3月期 (2018年7月4日)	2,283 個	普通株式 228,300 株	無償	1株当たり1円	2021年7月25日から 2048年7月24日

(2)区分別の内訳

発行年 (発行決議日)	取締役(社外取締役を除く)		監査役		執行役員	
	個数	保有者数	個数	保有者数	個数	保有者数
2015年3月期 (2014年7月4日)	579 個	6 名	87 個	1 名	78 個	2 名
2016年3月期 (2015年5月8日)	—	—	68 個	1 名	—	—
2016年3月期 (2015年7月8日)	453 個	4 名	—	—	408 個	8 名
2017年3月期 (2016年7月13日)	1,299 個	7 名	—	—	1,066 個	18 名
2018年3月期 (2017年7月5日)	1,373 個	8 名	—	—	1,446 個	26 名
2019年3月期 (2018年7月4日)	1,251 個	9 名	—	—	1,032 個	27 名

- (注) 1. 執行役員のうち、取締役を兼務しているものの保有状況は、取締役の欄に記載しています。  
 2. 監査役が保有している新株予約権は、当社取締役または執行役員在任中に付与されたもので、監査役在任中に付与されたものではありません。  
 3. 2019年3月期末日における新株予約権の目的となる株式の種類及び総数(退任者の保有分を含む)は、普通株式1,420,500株です。  
 4. 新株予約権の主な行使条件は、後記2. 当連結会計年度中に当社使用人等に対して職務執行の対価として交付された新株予約権等の内容の概要に記載するものと同様である。

2. 当連結会計年度中に当社使用人等に対して職務執行の対価として交付された新株予約権等の内容の概要

名 称	三井物産株式会社 2019年3月期第1回新株予約権(株価条件付株式報酬型ストックオプション)		
発行決議の日	2018年7月4日		
新株予約権の数	1,251個	1,032個	208個
交付された人数	当社取締役(社外取締役を除く)9名	取締役を兼務しない当社執行役員(在外執行役員を除く)27名	退任執行役員2名
新株予約権の目的である株式の種類及び数	当社普通株式 125,100株	当社普通株式 103,200株	当社普通株式 20,800株
新株予約権の発行価額	無償		
新株予約権の行使に際して出資される財産の価額	1株当たり1円		
新株予約権の行使期間	2021年7月25日から2048年7月24日		
新株予約権の主な行使条件	(1)新株予約権者は、当社取締役、執行役員及び監査役のいずれの地位も喪失した日の翌日から起算して10年経過した場合には、以降、新株予約権を行使することができないものとする。 (2)新株予約権者は、株価条件として、割当日から3年間の当社株価成長率がTOPIX(東証株価指数)成長率と同じか、または上回った場合のみ、割り当てられた新株予約権を全て行使することができ、当社株価成長率がTOPIX成長率を下回った場合には、その度合いに応じ、割り当てられた新株予約権の一部しか行使することができないものとする(株価条件の詳細は後記のとおり)。		

(注) 退任執行役員2名に対する交付は、在外勤務中に交付を保留していたことによるものです。

〔株価条件の詳細〕

1. **当社株価成長率**<sup>(\*)1</sup>が**TOPIX(東証株価指数)成長率**<sup>(\*)2</sup>と同じ、または上回った場合、付与された新株予約権を全て行使できる。
2. 当社株価成長率がTOPIX成長率を下回った場合、**付与された新株予約権の一部**<sup>(\*)3</sup>しか行使できない。

(\*)1 割当日から権利行使期間開始日までの3年間の当社株価成長率で、以下の式で算出。

A: 権利行使期間開始日の属する月の直前3か月の各日の東京証券取引所における当社普通株式の終値平均値

B: 新株予約権の割当日以後、権利行使期間開始日までの間における当社普通株式1株当たりの配当金の総額

C: 新株予約権割当日の属する月の直前3か月の各日の東京証券取引所における当社普通株式の終値平均値

$$\text{当社株価成長率} = (A + B) \div C$$

(\*)2 割当日から権利行使期間開始日までの3年間のTOPIX成長率で、以下の式で算出。

D: 権利行使期間開始日の属する月の直前3か月の各日の東京証券取引所におけるTOPIXの終値平均値

E: 新株予約権割当日の属する月の直前3か月の各日の東京証券取引所におけるTOPIXの終値平均値

$$\text{TOPIX成長率} = D \div E$$

(\*)3 **行使できる新株予約権の個数 = 付与された新株予約権の個数 × (当社株価成長率 ÷ TOPIX成長率)**

## 会計監査人の状況

### 1. 会計監査人の名称

有限責任監査法人トーマツ

### 2. 会計監査人に対する報酬等の額

当連結会計年度に係る、当社及び当社の連結子会社の会計監査人に対する報酬額は以下のとおりです。

(単位：百万円)

区 分	監査証明業務に基づく報酬額	非監査業務に基づく報酬額
当 社	750	6
連結子会社	697	3
計	1,447	9

- (注) 1. 当社は、会計監査人との契約において、会社法に基づく監査と金融商品取引法に基づく監査の監査報酬の額を区分していません。  
 2. 監査役会は、日本監査役協会が公表する「会計監査人との連携に関する実務指針」を踏まえ、取締役、社内関係部署及び会計監査人からの必要な資料の入手や報告の聴取を通じて、会計監査人の監査計画の内容、従前の事業年度における職務執行状況や報酬見積りの算出根拠などを確認し、検討した結果、会計監査人の報酬等につき、会社法第399条第1項の同意を行っています。  
 3. 一部の子会社については、当社の会計監査人以外の公認会計士または監査法人(外国におけるこれらの資格に相当する資格を有するものを含む)の監査を受けています。

### 3. 非監査業務の内容

当社は、会計監査人に対して、公認会計士法第2条第1項の業務以外の業務(非監査業務)である、税務関連業務等を委託しています。

### 4. 会計監査人の解任または不再任の決定の方針

当社は会計監査人の解任、不再任等の決定の方針を次のとおりとしています。

- ①会計監査人の任期は1年とし、再任を妨げない。
- ②会計監査人の選任、解任及び不再任は、監査役会において、これを株主総会の付議議案とする旨決議する。会計監査人の再任については、監査役会にて決議する。
- ③当社都合の場合の他、会計監査人が、会社法、公認会計士法等の法令に違反または抵触した場合、公序良俗に反する行為があった場合、及び、監査契約に違反した場合、会計監査人の解任または不再任を株主総会の付議議案とすることが妥当かどうかを監査役会にて検討する。
- ④監査役会は、会計監査人が会社法第340条第1項各号に定める項目に該当する場合は、監査役の全員の同意に基づき会計監査人を解任することができる。

## 業務の適正を確保するために必要な体制及び当該体制の運用状況

当社の「業務の適正を確保するために必要な体制」(会社法第362条第4項第6号)の概要及び当該体制の運用状況の概要は次のとおりです。

なお、上記体制については、当社ウェブサイトにも、より詳細な内容を掲載しています。

(<https://www.mitsui.com/jp/ja/company/outline/governance/index.html>)

### 1. 取締役及び使用人の職務の執行が法令及び定款に適合することを確保するための体制

- ①法令遵守及び倫理維持(「コンプライアンス」)を全役職員の業務遂行上の最重要課題のひとつとして位置づけた「三井物産役職員行動規範」の制定
- ②チーフ・コンプライアンス・オフィサー(CCO)を委員長とするコンプライアンス委員会設置、コンプライアンス意識の徹底・向上のための研修実施、内部通報窓口の社内外への複数設置、違反者の厳正処分、及び遵守状況の監視
- ③監査役による取締役及び使用人の業務執行における法令・定款等の遵守状況監視
- ④社外取締役選任による取締役会の監督機能強化及び社外役員を含めた各種諮問委員会設置による経営の客観性・透明性確保

#### 上記体制の運用状況

##### ■コンプライアンスについて

当社では、全役職員に三井物産役職員行動規範等の遵守に関する誓約書を毎年度提出させ、また、コンプライアンス関連のワークショップ、セミナー及び意識調査アンケートを実施するなど、コンプライアンスの徹底及びインテグリティの浸透に取り組んでいます。2019年3月期は、コンプライアンス見直し月間を設け、「インテグリティについて考える」のテーマの下、社長・CCOをはじめとする経営陣からのメッセージ発信、CCOを含む代表取締役3名によるパネルディスカッション、社外講師によるセミナー等を実施しました。また、役職員行動規範を解説するコンプライアンスハンドブックを配布し、その理解度を確かめるためのe-learningを実施し、役職員のコンプライアンスに係る理解や意識の向上を図りました。更に、類似事案の再発防止を図るべく、グループ内で発生したコンプライアンスに係る重要事案を共有する取組みを進めています。発見統制機能の中核である内部通報制度に関しては、監査役ルートを含む8ルートを設置するとともにCCO以下、コンプライアンスに関する問題で何かおかしいと思うことがあったら声を挙げる“Speak Up”を促すメッセージの継続的な発信、ポスターの社内掲示、内部通報制度紹介動画のイントラ掲載等の取組みを進め、その更なる利用を促すとともに、内部通報制度規程を改訂、通報者に対する不利益取扱いや報復の禁止を明確化し、違反者は懲戒処分の対象となる旨を明記し、内部通報制度への信頼性の向上に努めました。また、コンプライアンス委員会、経営会議、取締役会において年2回コンプライアンス体制の状況につき報告、それぞれの場で活発に議論を行い、体制改善につなげています。

##### ■監査役による監視状況について

監査役は、取締役会のほか、経営会議等の重要な会議への出席や決裁書類の閲覧等を通じて経営陣の意思決定過程の監査を行い、経営幹部との定期的な面談、会計監査人・内部監査部門との連携を含む監査活動を通じて、取締役の職務の執行の監査を行っています。

##### ■取締役会の監督機能強化及び経営の客観性・透明性の確保について

当社では多様なバックグラウンドを持つ5名の社外取締役を選任し、専門的な知見を経営及びその監督に活用しています。社外取締役は、各々の専門性に根ざした意見及び視座を提供しており、取締役会で審議される案件の多角的な分析を通じた監督機能強化に大きく寄与しています。2019年3月期は、社外取締役及び社外監査役で構成する社外役員会議を9回開催し、本部ごとの事業戦略、連結内部統制とグローバルグループ監査、取締役会の実効性評価等について議論しました。また、ガバナンス委員会(3回)、指名委員会(4回)及び報酬委員会(5回)でも社外役員の意見を踏まえた議論を行い、経営の客観性・透明性の確保に努めました。加えて、諮問委員会の構成、目的、取締役会への報告の運用の見直しを行うなど、諮問委員会の機能強化に取り組まれました。具体的には、指名委員会の委員の過半数を社外役員(社外取締役及び社外監査役)が占めるよう構成を見直し、また、指名委員会の目的にCEO等の後継者計画策定とCEOを含む取締役・執行役員に関する審議を加え、更に、各諮問委員会の活動状況の取締役会への報告にあたっては、議論内容の具体性をより意識して報告するよう運用を改めました。



## 2. 取締役の職務の執行に係る情報の保存及び管理に関する体制

情報管理規程等に基づく、株主総会議事録、取締役会議事録等重要情報の保存・管理

### 上記体制の運用状況

当社では、意思決定過程を適切に検証できるよう、株主総会、取締役会等の重要な会議体の議事録を速やかに作成し、保管しています。

また、情報管理規程等に基づく情報管理を徹底しており、社外秘情報のうち特に高度な管理を要するものを「重点管理情報」に指定し、取扱者を限定するなど、より厳密な管理を実施しています。

## 3. 損失の危険の管理に関する規程その他の体制

- ① 営業本部長及び地域本部長による、自らの権限内の事業等に伴う損失の危険（「リスク」）の管理
- ② 内部統制委員会及びポートフォリオ管理委員会を核とした、コーポレートスタッフ部門が多種多様なリスクを全社一元的に管理する統合リスク管理体制の構築
- ③ 「危機対策本部規程」及び「災害時事業継続管理規程」に基づく危機対策本部設置等による重大事態発生時の対応

### 上記体制の運用状況

当社では、権限分掌制度及び稟議制度を適切に運用し、コーポレートスタッフ部門が営業部門の意思決定を監視し、支援することにより、事業活動に伴うリスクの管理を徹底しています。

また、取引先への与信限度額等の事前設定、専門部署によるモニタリングにより、信用リスク・カントリーリスク等の定量的リスクを管理しています。

2019年3月期は、ポートフォリオ管理委員会を9回開催し、全社ポートフォリオのモニタリング及び個別案件の審査を通じ、全社レベルでの適切なリスク管理を継続しています。

また、内部統制委員会を2回開催し、その下部組織であるコンプライアンス委員会、開示委員会及びJ-SOX委員会の活動内容を踏まえ、当社グループの内部統制体制及びその運用状況のレビューを行いました。加えて、内部統制体制の見直しを行い、これまで内部統制委員会が担っていた内部統制の基本方針策定、一元的管理体制整備、有効性の維持・向上といった役割と責任は、2019年4月以降経営会議が担うこととし、内部統制委員会を廃止し、その下部組織を経営会議の下部組織とします。

## 4. 取締役の職務の執行が効率的に行われることを確保するための体制

- ① 取締役会による取締役の職務執行の監督及び執行役員制による効率的な職務執行
- ② 経営会議、ポートフォリオ管理委員会等の各種会議体設置による、経営執行段階の意思決定の効率化及び適正化
- ③ 営業本部制及び地域本部制によるスピード感のある経営及び関係コーポレートスタッフ部門各々が審議の上、全社最適の観点から代表取締役が決裁する稟議制度の構築
- ④ 中期経営計画及び年度事業計画に基づく経営諸施策遂行及び進捗状況の取締役会における検証

### 上記体制の運用状況

当社では、営業部門とコーポレートスタッフ部門の連携により、稟議制度を円滑に運用しています。また、経営会議、ポートフォリオ管理委員会等の各種会議体で充実した検討を行うことにより、経営執行段階の適正かつ効率的な意思決定を実現しています。

取締役会開催にあたっては、取締役会事務局にて、会社法及び社内規程等に基づいて付議・報告案件の選別を行い、取締役会による取締役の職務執行の監督が適切かつ効率的に行われることを担保しています。

取締役会では、経営課題への対応の進捗状況を検証するため、個別案件のみならず、全社的な課題に関する付議・報告を行っており、2019年3月期は、同期事業計画につき審議した他、当社のマテリアリティの見直し等について付議・報告が行われました。

また、社内手続に関する各種規程の見直しを随時実施し、業務執行の効率化を図っています。

## 5. 当社グループにおける業務の適正を確保するための体制

- ① 関係会社の自律経営を原則とした上での、経営状況把握、連結経営体制構築・維持、及び出資者としての適切な意思表示等による関係会社の適正な管理
- ② 主要な関係会社の法令及び社内規則等の遵守状況監査要請
- ③ 関係会社における適切な内部通報制度の構築及び不利益取扱いの禁止の要請、及び関係会社からの、当社役員コンプライアンス違反等に関する社内外の内部通報窓口を通じた当社コンプライアンス委員会への報告

**上記体制の運用状況**

当社では、子会社・関連会社に対し、当社との関係性に応じ、「三井物産コーポレート・ガバナンス及び内部統制原則」の遵守を義務づけ、または当社の体制に準じた内部統制体制の整備を要請しています。

また、当社役員を関係会社主管者とし、「関係会社主管者職務規程」に基づく関係会社の管理を実施しています。主要関係会社に対しては、当社内部監査部から常勤監査役を差し入れるなど、グループ監査を強化しています。

更に、連結グループにおける事業経営の実効性を高め、各社が創造する付加価値を最大化することを目的として、「三井物産グローバル連結経営指針」を定め、グループ各社の有機的な連携や、各社が保有する経営資源、機能及びネットワークの共有を促しています。

2019年3月期は、主要な国内関係会社において、2018年3月期に引き続き、コンプライアンス意識調査アンケートを実施し、また、主要な国内関係会社に対し、コンプライアンスハンドブックを配布しグループ・コンプライアンスの強化に努めました。更に、グループ全体で共有すべきコンプライアンスやインテグリティに関する基本的な考え方をまとめた「三井物産グループ行動指針“With Integrity”」を策定し、社内外に公表しています。国内外の独占禁止法及び贈賄防止法に関する事案の報告・相談窓口としてのグローバル・グループ・ホットラインも、展開国の拡充を進めています。

**6. 監査役がその職務を補助すべき使用人を置くことを求めた場合における当該使用人に関する事項、当該使用人の取締役からの独立性に関する事項、及び監査役の当該使用人に対する指示の実効性の確保に関する事項**

- ① 監査役室設置及び3名以上の専任使用人の配置
- ② 監査役室の組織変更及び室員人事に関する監査役の同意

**上記体制の運用状況**

2019年3月期末現在、監査役室には専任の監査役スタッフを5名配置し、監査役の職務の補助にあたらせています。

また、監査役室の室員人事の決定は、担当取締役が監査役の同意を得て行いました。

**7. 監査役への報告・情報収集に関する体制**

- ① 監査役による取締役会、経営会議、その他の重要な会議への出席、監査役への重要書類等の回付、会長・社長・CCO・その他の取締役・執行役員等との定期的な連絡会議の開催等による監査役への報告(関係会社に関する事項を含む)
- ② 会社に著しい損害等を及ぼすおそれのある事実を発見した場合の、取締役から監査役会への即時の報告
- ③ 主要関係会社の往査及び関係会社監査役との日頃の連携等を通じた関係会社管理の状況の監査

**上記体制の運用状況**

監査役は、会社に重大な影響を及ぼすおそれのある問題が発生した際に担当部署責任者より速やかに報告を受けるほか、取締役会及びその諮問委員会、会長・社長との定期的な面談や、社外取締役との意見交換会、会計監査人・内部監査部との定例会議を通じての情報共有・意見交換等を通じて、情報収集に努めています。更に、常勤監査役は、経営会議等の重要な会議への出席、取締役・執行役員、コーポレートスタッフ部門部長等との定期的な面談や、重要書類の閲覧、子会社の常勤監査役との連絡会等を通じ、日々経営執行の状況についての情報収集・調査に努め、監査役会で報告するほか書面でも社外監査役に情報共有しています。監査役は、国内外の主要な関係会社の中から当該年度において重要と位置づけられる会社を監査役会指定重要関係会社に指定し、これらを中心に関係会社を往訪し、また、現地会計監査人とも意見交換するなどして、グローバルグループベースでの関係会社管理状況についても能動的に情報収集を行っています。

上記のとおり当社では、グローバル連結経営上の問題事象・重要事項が、適時適切に監査役に報告される環境を整備し、実効的に運用しています。

**8. その他監査役の監査が実効的に行われることを確保するための体制**

- ① 取締役による監査役監査環境の整備
- ② 内部監査部、法務部、経理部その他各部の監査への協力
- ③ 会計監査人との相互に緊密な連携
- ④ 顧問弁護士その他社外専門家への委嘱
- ⑤ 監査役の職務の執行に係る費用の負担

**上記体制の運用状況**

監査役は、内部監査部及び会計監査人との毎月の個別定例会、並びに三者合同定例連絡会等を通じて意見交換を行うほか、内部監査部が被監査部門(被監査関係会社)に対して行う報告会に参加して所見を述べるなど、実効的な三様監査を実施しています。監査役は、会計監査人の独立性・職務執行体制・品質管理体制等についても会計監査人との意見交換を行い、会計監査の相当性の判断に役立てています。また、監査役会では、独自に顧問弁護士を起用し、監査役業務に関する相談を適宜実施しています。

当社では、かかる弁護士費用も含め、監査役の職務執行のために必要な予算を確保するとともに、監査役の職務の執行に係る費用を負担しました。

**9. 反社会的勢力排除に向けた基本的な考え方及びその体制**

反社会的勢力及びその関係取引先との取引禁止等、反社会的勢力排除に向けた基本的な考え方の全役職員への周知徹底並びに社内における対応部署の設置による、警察、弁護士などの外部専門機関との連携

**上記体制の運用状況**

当社では、反社会的勢力の排除を全役職員に徹底しており、個別の事業活動においても、新規案件の検討段階で反社会的勢力排除のためのチェックリストを活用したスクリーニングを実施しています。

## 連結計算書類

### 連結持分変動計算書

当連結会計年度(2018年4月1日～2019年3月31日)

(単位：百万円)

科 目	親会社の所有者に帰属する持分						非支配持分	資本合計
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	その他の資本の 構成要素	自己株式	合 計		
2018年4月1日残高	341,482	386,165	2,903,432	448,035	△ 104,399	3,974,715	243,408	4,218,123
会計方針の変更による累積的影響額			△ 3,535			△ 3,535		△ 3,535
会計方針の変更を反映した当期首残高	341,482	386,165	2,899,897	448,035	△ 104,399	3,971,180	243,408	4,214,588
当期利益			414,215			414,215	17,548	431,763
その他の包括利益				15,702		15,702	△ 2,791	12,911
当期包括利益						429,917	14,757	444,674
所有者との取引額：								
親会社の所有者への配当 (1株当たり80円)			△ 139,038			△ 139,038		△ 139,038
非支配持分株主への配当							△ 18,504	△ 18,504
自己株式の取得					△ 17	△ 17		△ 17
自己株式の処分		△ 151	△ 207		373	15		15
自己株式の消却			△ 96,467		96,467	-		-
ストックオプション 発行に伴う報酬費用		231				231		231
非支配持分株主との資本取引		1,090		△ 212		878	27,481	28,359
利益剰余金への振替			255	△ 255		-		-
2019年3月31日残高	341,482	387,335	3,078,655	463,270	△ 7,576	4,263,166	267,142	4,530,308

前連結会計年度(ご参考)(2017年4月1日～2018年3月31日)

(単位：百万円)

科 目	親会社の所有者に帰属する持分						非支配持分	資本合計
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	その他の資本の 構成要素	自己株式	合 計		
2017年4月1日残高	341,482	409,528	2,550,124	485,447	△ 54,402	3,732,179	257,983	3,990,162
当期利益			418,479			418,479	22,823	441,302
その他の包括利益				△ 2,366		△ 2,366	△ 4,339	△ 6,705
当期包括利益						416,113	18,484	434,597
所有者との取引額：								
親会社の所有者への配当 (1株当たり60円)			△ 105,844			△ 105,844		△ 105,844
非支配持分株主への配当							△ 24,098	△ 24,098
自己株式の取得					△ 50,057	△ 50,057		△ 50,057
自己株式の処分		△ 29	△ 30		60	1		1
ストックオプション 発行に伴う報酬費用		247				247		247
非支配持分株主との資本取引		△ 23,581		5,657		△ 17,924	△ 8,961	△ 26,885
利益剰余金への振替			40,703	△ 40,703		-		-
2018年3月31日残高	341,482	386,165	2,903,432	448,035	△ 104,399	3,974,715	243,408	4,218,123



連結包括利益計算書

(ご参考)

科 目	当連結会計年度 (2018年4月1日～2019年3月31日)		前連結会計年度 (2017年4月1日～2018年3月31日)	
	百万円		百万円	
<b>包括利益：</b>				
当期利益	431,763		441,302	
その他の包括利益：				
再分類修正により連結損益計算書へ分類されない項目：				
FVTOCIの金融資産	95,161		174,983	
確定給付制度の再測定	△	11,075		14,242
持分法適用会社におけるその他の包括利益に対する持分	△	5,859		4,372
上記に係る法人所得税	△	30,397	△	48,857
再分類修正により連結損益計算書へ分類される項目：				
外貨換算調整勘定	△	43,489	△	82,590
キャッシュ・フロー・ヘッジ	△	6,192		6,184
持分法適用会社におけるその他の包括利益に対する持分		10,540	△	42,390
上記に係る法人所得税		4,222	△	32,649
その他の包括利益計		12,911	△	6,705
当期包括利益	<b>444,674</b>		<b>434,597</b>	
当期包括利益の帰属：				
親会社の所有者	429,917		416,113	
非支配持分	14,757		18,484	

## セグメント情報

(ご参考)

当連結会計年度(2018年4月1日～2019年3月31日)

(単位:百万円)

	鉄鋼製品	金属資源	機械・ インフラ	化学品	エネルギー	生活産業	次世代・ 機能推進
収益	247,383	1,055,801	904,641	1,747,400	707,978	2,125,847	163,418
売上総利益	27,237	175,602	130,743	142,791	134,030	158,867	66,716
持分法による投資損益	16,200	59,331	87,476	12,845	40,329	29,315	11,675
当期利益 (親会社の所有者に帰属)	9,851	167,209	78,428	4,460	95,723	42,435	16,562
基礎営業キャッシュ・フロー	5,879	181,451	73,970	29,886	219,064	24,827	20,816
当連結会計年度末現在の総資産	606,557	2,222,894	2,450,551	1,266,657	2,425,363	2,378,015	667,314

	合 計	その他	調整・消去	連結合計
収益	6,952,468	5,079	△ 23	6,957,524
売上総利益	835,986	2,878	△ 397	838,467
持分法による投資損益	257,171	110	△ 1,914	255,367
当期利益 (親会社の所有者に帰属)	414,668	529	△ 982	414,215
基礎営業キャッシュ・フロー	555,893	3,886	10,742	570,521
当連結会計年度末現在の総資産	12,017,351	7,044,713	△ 7,116,285	11,945,779

前連結会計年度(2017年4月1日～2018年3月31日)(修正再表示後)

(単位:百万円)

	鉄鋼製品	金属資源	機械・ インフラ	化学品	エネルギー	生活産業	次世代・ 機能推進
収益	238,240	946,369	447,088	1,186,673	534,293	1,409,378	127,326
売上総利益	41,874	206,767	121,943	136,573	96,808	139,533	45,084
持分法による投資損益	13,349	61,806	96,525	11,318	24,544	22,842	5,040
当期利益(損失) (親会社の所有者に帰属)	24,728	257,617	89,617	34,235	48,601	△ 26,340	△ 4,637
基礎営業キャッシュ・フロー	14,179	240,829	158,846	50,174	175,282	7,118	3,061
前連結会計年度末現在の総資産	680,257	2,260,050	2,364,616	1,228,773	2,083,766	1,987,306	662,192

	合 計	その他	調整・消去	連結合計
収益	4,889,367	1,937	845	4,892,149
売上総利益	788,582	1,278	845	790,705
持分法による投資損益	235,424	△ 116	△ 367	234,941
当期利益(損失) (親会社の所有者に帰属)	423,821	2,469	△ 7,811	418,479
基礎営業キャッシュ・フロー	649,489	8,558	8,440	666,487
前連結会計年度末現在の総資産	11,266,960	6,506,907	△ 6,467,207	11,306,660

- (注) 1. 「その他」には、当社グループ会社に金融サービス及び業務サービスなどを行うコーポレートスタッフ部門が含まれております。前連結会計年度末現在及び当連結会計年度末現在の総資産のうち、主なものは財務活動に係る現金及び現金同等物、定期預金及び上記サービスに関連するコーポレートスタッフ部門及び連結子会社の資産です。
2. 各セグメント間の内部取引は原価に利益を加算した価格で行われております。
3. 「調整・消去」の当期利益(損失)(親会社の所有者に帰属)には、特定の報告セグメントに配賦されない損益及びセグメント間の内部取引消去が含まれております。
4. 基礎営業キャッシュ・フローは、連結キャッシュ・フロー計算書における営業活動によるキャッシュ・フローから営業活動に係る資産・負債の増減の合計を控除して算定しております。
5. 当連結会計年度より、新連結決算システムの導入に伴い、従来、簡便的手法により実施していた連結内債権債務の消去を精緻化し、資産規模の評価及び資産効率測定の尺度として、より適切なセグメント別総資産を算定しております。この変更に伴い、前連結会計年度末現在の総資産を修正再表示しております。

1. 連結の範囲及び持分法の適用に関する事項

- (1) 連結子会社 278社  
三井石油開発株式会社、Mitsui Iron Ore Development Pty. Ltd.、  
Mitsui-Itochu Iron Pty. Ltd.、Mitsui Sakhalin Holdings B.V.、  
MITSUI COAL HOLDINGS PTY., LTD. 他
- (2) 持分法適用会社(関連会社及びジョイント・ベンチャー) 213社  
Japan Australia LNG(MIMI)Pty. Ltd.、P.T. Paiton Energy、JA三井リース株式会社 他

現地法人を除く連結子会社が保有する関係会社のうち当該連結子会社にて連結経理処理されているもの(2019年3月末現在合計472社)については、上記会社数から除外しております。

2. 会計方針に関する事項

- (1) 連結計算書類の作成基準  
当社の連結計算書類は、会社計算規則第120条第1項の規定により、国際会計基準(以下、IFRS)に準拠して作成しております。但し、同項後段の規定に準拠して、IFRSにより要請される記載及び注記の一部を省略しております。

- (2) 資産の評価基準及び評価方法

① 金融資産の評価基準及び評価方法

当社及び連結子会社は、当連結会計年度よりIFRS第9号「金融商品」(2014年7月改訂)を適用しております。

償却原価で測定される金融資産

負債性の非デリバティブ金融資産の内、契約上のキャッシュ・フローを回収することを事業目的とし、かつ特定の期日に元本及び元本残高に係る利息の支払いのみによるキャッシュ・フローを生じさせるものを公正価値で当初認識しております。当初認識後は実効金利法に基づき償却原価で測定しております。信用リスクが当初認識以降に著しく増大していない場合、12か月の予想信用損失に等しい金額で損失評価引当金を測定し、信用リスクが当初認識以降に著しく増大している場合、全期間の予想信用損失に等しい金額で損失評価引当金を測定しております。但し、営業債権については、信用リスクの著しい増大の有無は判定せず、常に全期間の予想信用損失に等しい金額で損失評価引当金を測定しております。

信用リスクの著しい増大の判定及び予想信用損失の測定にあたっては、合理的で裏付け可能な定量的情報及び定性的情報の両方を考慮しております。これには、過去の信用損失の実績、期日経過の情報、及び内部信用格付けなどの内部情報の他、合理的に利用可能な将来予測情報が含まれます。

損失評価引当金の繰入額及び戻入額は当期利益に認識しております。

FVTPLの金融資産(公正価値で測定しその評価差額を当期利益に認識する金融資産)

資本性金融資産(FVTOCIの金融資産に区分されるものを除く)、並びに資本性金融資産以外の償却原価測定の要件を満たさない非デリバティブ金融資産を公正価値で当初認識しております。当初認識後は公正価値で測定し、その評価差額を当期利益に認識しております。

FVTOCIの金融資産(公正価値で測定しその評価差額をその他の包括利益に認識する金融資産)

投資先との取引関係の維持または強化による収益基盤の拡大を主な目的として保有する資本性金融資産については、公正価値で当初認識しております。当初認識後は公正価値で測定し、その評価差額をその他の包括利益に認識しております。

FVTOCIの金融資産の認識を中止した場合、連結財政状態計算書のその他の資本の構成要素の累積額を利益剰余金に直接振り替えており、当期利益に認識しておりません。なお、FVTOCIの金融資産から生じる受取配当は原則として当期利益に認識しております。

② 棚卸資産の評価基準及び評価方法

個々の棚卸資産に代替性が無い場合は個別法により、また個々の棚卸資産に代替性がある場合は主として総平均法により、原価を算定し、原価と正味実現可能価額のうちいずれか低い額により測定を行っております。また、主に近い将来販売し、価格変動により利益を獲得する目的で取得した棚卸資産については、販売費用控除後の公正価値で測定し、販売費用控除後の公正価値の変動は当期利益で認識しております。

③ 有形固定資産、投資不動産及び無形資産の評価基準、評価方法並びに償却方法

有形固定資産及び投資不動産

取得原価から減価償却累計額及び減損損失累計額を控除した後の金額で表示しております。減価償却については、主として定額法にて減価償却を行っております。有形固定資産のうち、鉱業権については主として生産高比例法にて減価償却しております。

無形資産

耐用年数を確定できる無形資産は、取得原価から償却累計額及び減損損失累計額を控除した後の金額で表示しております。償却については、主として定額法により償却しております。

暖簾及び耐用年数を確定できない無形資産は償却を行わず、取得原価から減損損失累計額を控除した後の金額で

表示しております。

#### 有形固定資産、投資不動産及び無形資産の減損

期末日に減損の兆候の有無を判定しており、減損の兆候が存在する場合、回収可能価額の見積りを行っております。但し、暖簾及び耐用年数を確定できない無形資産については毎年減損テストを実施しております。資産または資金生成単位の帳簿価額が回収可能価額を超過する場合、資産は減損しているものとし、回収可能価額まで減額し連結損益計算書上の損失として認識しております。

暖簾以外の資産については、過年度に認識した減損損失が、もはや存在しないまたは減少している可能性を示す兆候の有無を期末日に判定しており、こうした兆候が存在する場合、回収可能価額の見積りを行っております。減損損失の戻入は、当該資産の戻入後の資産の帳簿価額が、減損損失を認識しなかった場合の帳簿価額(減価償却累計額控除後または償却累計額控除後)を超えない範囲で過去に認識した減損損失を連結損益計算書上の利益として戻入しております。なお、暖簾の減損損失は戻入を行っておりません。

#### (3) 引当金の計上基準

当社及び連結子会社は過去の事象の結果として現在の法的債務または推定債務を有しており、当該債務を決済するために経済的便益を有する資源の流出が生じる可能性が高く、当該債務の金額について信頼性をもって見積ることが可能である場合に引当金を認識しております。引当金は報告期間の末日における現在の債務を決済するために要する支出の最善の見積額により計上しております。貨幣の時間価値の影響が重要である場合には、当該負債に固有のリスクを反映させた現在の税引前割引率を用いて引当金を現在価値に割引計算しております。時の経過による引当金の増加は金融費用として認識しております。

#### (4) 従業員給付の会計処理

当社及び一部の連結子会社は、確定給付型の退職年金及び退職一時金制度を採用しております。これらの制度に係る年金費用は、予測単位積増方式を用いた保険数理計算に基づき算定しております。また、制度資産の公正価値と保険数理計算により算定された確定給付制度債務の差額である給付制度の積立状況を連結財政状態計算書上で資産及び負債として認識し、確定給付制度の再測定を資本の部のその他の資本の構成要素で認識し、発生時にその他の資本の構成要素から利益剰余金に振り替えております。

また、当社及び一部の連結子会社は、確定拠出型の年金制度を採用しております。確定拠出型年金制度への拠出は、従業員が役務を提供した期間に費用として認識しております。

#### (5) 収益の計上基準

顧客との契約から生じる収益について、5ステップアプローチ(①顧客との契約の識別、②契約における履行義務の識別、③取引価格の算定、④取引価格を契約における履行義務に配分、⑤企業が履行義務の充足時に収益を認識)に基づき、契約の履行義務を充足した時点で収益を認識しております。なお、履行義務の識別にあたっては、本人か代理人かの検討を行っており、自らの約束の性質が、特定された財またはサービスを自ら提供する履行義務である場合には、本人として収益を対価の総額で認識しており、それらの財またはサービスが他の当事者によって提供されるように手配する履行義務である場合には、代理人として収益を手数料または報酬の額もしくは対価の純額で認識しております。

当社及び連結子会社は、財の販売について、多種多様な商品の販売、金属・化学品・食料・物資などの幅広い製品の販売、石炭・鉄鉱石・石油・ガスなどの販売、不動産の開発販売などを行っており、国内取引においては、引渡、検収、出荷等により、貿易取引においては、インコタームズによる危険及び費用の移転等により、顧客が財に対する支配を獲得した時点で収益を認識しています。また、サービスの提供について、物流ロジスティクスサービス、情報通信サービス、技術支援などの多種多様な役務提供に対する対価として手数料を受け取る取引、さまざまな商品売買取引に関する手数料を受け取る取引等を行っており、契約から識別されたサービスについての履行義務が充足された時点、もしくは充足するにつれて収益を認識しております。

なお、一定の期間に亘り履行義務が充足される取引については、進捗度を合理的に測定できる場合に限り、履行義務の充足につれて進捗度を測定して収益を認識しています。進捗度を合理的に測定できないが、履行義務の充足に要したコストの回収が見込まれる場合には、合理的な測定ができるようになるまで、発生したコストの範囲内でのみ収益を認識しております。

#### (6) 外貨の換算基準

海外連結子会社及び持分法適用会社の財務諸表の換算については、資産及び負債は期末日の為替レートにて円貨に換算し、収益及び費用は対応する期間の平均為替レートにて円貨に換算しております。この結果生じる換算差額は、外貨換算調整勘定としてその他の資本の構成要素に計上しております。

外貨建取引は、取引日における為替レートにて当社及び連結子会社の各機能通貨に換算しております。期末日における外貨建貨幣性資産及び負債、公正価値で測定される外貨建非貨幣性資産及び負債は、期末日の為替レートにて機能通貨に換算しており、この結果生じる換算差額は、原則として当期利益に認識しております。外貨建取得原価にて測定される非貨幣性項目は、取引日の為替レートにて換算しております。

#### (7) 消費税及び地方消費税の会計処理

税抜方式



## 会計方針の変更に関する注記

当社及び連結子会社が当連結会計年度より適用している基準書は以下のとおりです。

基準書	基準名	概要
IFRS第9号	金融商品(2014年7月改訂)	金融商品の減損に予想損失モデルを導入
IFRS第15号	顧客との契約から生じる収益	顧客との契約からの収益認識に関する会計処理を規定

### IFRS第9号「金融商品」(2014年7月改訂)

本基準の適用にあたっては、経過措置に従い、過去の期間を修正再表示しておらず、利益剰余金の2018年4月1日残高は2,857百万円減少しており、当該影響は当連結会計年度の連結持分変動計算書上、「会計方針の変更による累積的影響額」として表示しております。なお、本基準の適用が当連結会計年度の連結財務諸表に与える影響は軽微です。

### IFRS第15号「顧客との契約から生じる収益」

当連結会計年度より、本基準に従い、5ステップアプローチ(①顧客との契約の識別、②契約における履行義務の識別、③取引価格の算定、④取引価格を契約における履行義務に配分、⑤企業が履行義務の充足時に収益を認識)に基づき、契約の履行義務を充足した時点で収益を認識しております。なお、履行義務の識別にあたっては、本人か代理人かの検討を行っており、自らの約束の性質が、特定された財またはサービスを自ら提供する履行義務である場合には、本人として収益を対価の総額で認識しており、それらの財またはサービスが他の当事者によって提供されるように手配する履行義務である場合には、代理人として収益を手数料または報酬の額もしくは対価の純額で認識しております。

本基準の経過措置に従い、適用開始による累積的影響を適用開始日に認識する方法を採用しておりますが、以下を除き、本基準の適用が連結財務諸表に与える影響は軽微です。

従来、IAS第18号「収益」に従い、財またはサービスの提供に関する重要なリスク及び経済価値に対するエクスポージャーを有していないことから代理人として収益を純額で認識していた取引のうち、顧客に財またはサービスが移転される前に当社が当該財またはサービスを支配している取引については、上述のとおり本基準では本人としての取引と判断されることから、収益を総額で認識しております。この結果、従前の会計基準を適用した場合と比較して、当連結会計年度の連結損益計算書において、収益及び原価が、それぞれ、2,054,731百万円増加しております。

また、連結損益計算書上、従来、収益は「商品売買による収益」、「役務提供による収益」及び「その他の収益」、原価は「商品販売に係る原価」、「役務提供に係る原価」及び「その他の収益の原価」にそれぞれ、区分表示していましたが、当連結会計年度より、「収益」及び「原価」に集約しています。

なお、本基準の適用により、利益剰余金の2018年4月1日残高は、678百万円減少し、当該影響は当連結会計年度の連結持分変動計算書上、「会計方針の変更による累積的影響額」として表示しております。

## 会計上の見積りの変更に関する注記

当連結会計年度における重要な会計上の見積りの変更は以下のとおりです。

### (減損損失)

エネルギーセグメントに属する当社連結子会社MEP Texas Holdingsが保有する米国テキサス州シェールオイル・ガス事業に関連する生産設備等の帳簿価額を回収可能価額46,172百万円まで減額し、11,612百万円の減損損失を連結損益計算書の「固定資産評価損益」に計上しております。当該減損損失は主に開発計画の変更に起因するものです。なお、回収可能価額は使用価値を用いており、割引率は、資金生成単位の固有のリスクを反映した市場平均と考えられる収益率を合理的に反映する率を使用しております。

化学品セグメントに属する当社連結子会社Novus Internationalにおいて、米国Gulf地区におけるEPCコスト高騰を主要因としてプロジェクト経済性が影響を受けたため、メチオニン製造能力の拡張計画の見直しを行なった結果、連結損益計算書に13,985百万円の損失を計上しております(「固定資産評価損益」7,946百万円、「固定資産処分損益」5,065百万円、「雑損益」974百万円)。

### (引当金の取崩)

前連結会計年度において生活産業セグメントに属する当社連結子会社Multigrain Tradingが計上した複数の長期契約上の義務履行に伴い生じると見込まれる損失25,006百万円の引当金について、当連結会計年度に当該契約の解約に至ったため、解約金額と引当金額との差額である11,083百万円を利益計上しました。当該利益は連結損益計算書の「マルチグレイン事業関連引当金繰入額及び取崩額」に表示されております。



## 連結財政状態計算書に関する注記

### 1. 担保に供している資産及び担保に係る債務

- (1) 担保に供している資産 591,173百万円  
担保に供している資産の内訳は次のとおりです。

現金及び預金	61,040百万円	投資	446,960百万円
営業債権及びその他の債権 (流動及び非流動)	21,924百万円	有形固定資産 その他	60,252百万円 997百万円

これらは、短期債務、長期債務、取引保証等に係る担保差入資産です。また、有形固定資産の金額は減価償却累計額及び減損損失累計額控除後です。

- (2) 担保に係る債務 83,692百万円

### 2. 営業債権及びその他の債権から直接控除した損失評価引当金 96,560百万円

流動 12,450百万円 非流動 84,110百万円

### 3. 有形固定資産の減価償却累計額及び減損損失累計額 2,112,330百万円

### 4. 投資不動産の減価償却累計額及び減損損失累計額 37,186百万円

### 5. 偶発債務

保証に対する当連結会計年度末における潜在的な最大支払額は次のとおりです。

金銭債務保証 978,732百万円  
契約履行保証 131,183百万円

潜在的な最大支払額は保証に基づく見込損失金額とは関係なく、通常将来見込まれる損失額を大幅に上回るものです。

なお、当連結会計年度末において連結財政状態及び連結経営成績に重大な影響を及ぼす保証の履行を行う可能性は僅かで見込んでおります。

## 連結持分変動計算書に関する注記

### 1. 当連結会計年度末日における発行済株式数

普通株式 1,742,345,627 株

上記の発行済株式数には自己株式(関連会社保有分を含む) 4,271,539株が含まれております。

### 2. 剰余金の配当に関する事項

- (1) 配当金支払額

決議	配当金の総額	1株当たり配当額	基準日	効力発生日
2018年6月21日 定時株主総会	69,516百万円	40円	2018年3月31日	2018年6月22日
2018年10月30日 取締役会	69,522百万円	40円	2018年9月30日	2018年12月4日

- (2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌連結会計年度となるもの  
2019年6月20日開催の定時株主総会の議案として、普通株式の配当に関する事項を次のとおり提案しております。

- ① 配当金の総額 : 69,524百万円
- ② 1株当たり配当額 : 40円
- ③ 基準日 : 2019年3月31日
- ④ 効力発生日 : 2019年6月21日

なお、配当原資については、利益剰余金とすることを予定しております。

### 3. 当連結会計年度末の新株予約権(権利行使期間の初日が到来していないものを除く。)の目的となる株式の種類及び数

普通株式 246,700 株

## 金融商品に関する注記

### 1. 金融商品の状況に関する事項

当社及び連結子会社は、円滑な事業活動に必要なレベルの流動性の確保と財務の健全性・安定性維持を資金調達の基本方針としており、金融機関からの長期借入金や社債の発行等により長期資金を中心とした資金調達を行っております。また資金需要へ機動的に対応するため、及び当社の有利子負債返済における金融情勢悪化の影響を最小限に抑えるために、十分な現金及び流動性の高い短期金融商品を保有しております。

受取手形、売掛金等の営業債権に関する信用リスクは、担当役員により承認されたクレジットライン管理に加え、随時実施している取引先調査を通じて管理しております。

その他の投資は主にFVTOCI及びFVTPLの金融資産であり、四半期毎に公正価値の把握を行っております。当社及び連結子会社は営業活動等に伴って生じる通貨、金利、商品などに係る相場変動リスクにさらされており、これらのリスクを回避あるいは軽減するために、各種デリバティブ取引を利用しております。

デリバティブ取引については、取引部署から独立した部署においてリスク管理を行っております。担当役員は、独立した部署によって定期的に報告されるポジションの総合的な評価、分析結果を通じて当社及び主要な連結子会社のデリバティブ取引及びこれに係る相場変動リスクの状況を把握し、会社としてのリスク管理方針を決定しております。

### 2. 金融商品の公正価値等に関する事項

2019年3月31日における期末帳簿価額、公正価値及びこれらの差額については、次のとおりです。なお、流動に分類される金融資産及び金融負債の公正価値は、帳簿価額が公正価値の合理的な近似値となっているため、開示しておりません。

(単位：百万円)

	当連結会計年度末 (2019年3月31日)		
	期末帳簿価額	公正価値	差額
金融資産			
非流動資産			
その他の投資(注)	1,947,565	1,947,775	210
営業債権及びその他の債権並びに その他の金融資産(注)	613,695	613,695	0
金融負債			
非流動負債			
長期債務(1年以内返済予定分を除く) 並びにその他の金融負債(注)	3,881,152	3,949,398	68,246

(注) その他の投資には、償却原価で測定される金融資産が含まれております。

その他の金融資産及びその他の金融負債の公正価値は、帳簿価額と近似値であるとみなしております。

営業債権及びその他の債権には貸付金等が、長期債務には借入金、社債等が含まれております。

デリバティブ債権及びデリバティブ債務については、その他の金融資産(流動・非流動)及びその他の金融負債(流動・非流動)に含まれております。これらは公正価値で測定されており、帳簿価額はそれぞれ194,465百万円及び124,092百万円です。

#### (1) その他の投資

取引所で取引されているその他の投資は、取引所の相場価格を用いて評価しております。市場性ないその他の投資は、主に割引キャッシュ・フロー法、類似企業比較法またはその他の適切な評価方法を用いて評価しております。その評価にあたっては、投資先の将来の収益性の見通し及び当該投資に関するリスクに応じた割引率等のインプット情報を考慮しております。

当連結会計年度において、期間の延長、将来原油価格の見通しの変更及び為替変動の影響により、LNGプロジェクトに対する投資の公正価値が86,033百万円増加しております。

#### (2) 営業債権及びその他の債権、長期債務

変動金利付非流動債権(長期貸付金を含む)及び変動金利付長期債務の公正価値は、帳簿価額と近似値であるとみなしております。固定金利付非流動債権あるいは固定金利付長期債務の公正価値は、各連結会計年度末時点で同一の残存期間の貸出、あるいは借入を、同様な条件をもって行う場合の推定金利を用いて将来キャッシュ・フローを割引くことにより算定しております。

#### (3) その他の金融資産、その他の金融負債

金融デリバティブ取引は、主に為替、金利及び現在入手可能な類似契約の相場を基に将来予想されるキャッシュ・フローを現在価値に割引いて評価しております。

また、取引所で取引されている商品デリバティブ取引は、取引所の相場価格を用いて評価しております。一部の商品デリバティブ取引は、取引所や価格提供会社、ブローカー等より入手した相場価格などを使用して評価しております。

## 投資不動産に関する注記

### 1. 投資不動産の状況に関する事項

当社及び一部の連結子会社は、東京都その他の地域において、賃貸用のオフィスビル及び商業施設等を保有しております。

### 2. 投資不動産の公正価値に関する事項

当連結会計年度末における帳簿価額及び公正価値は、それぞれ203,102百万円及び387,322百万円です。

帳簿価額は、取得原価から減価償却累計額及び減損損失累計額を控除した金額です。

また、公正価値は、所在する地域及び評価される不動産の種類に関する最近の鑑定経験を有し、かつ不動産鑑定士等の公認された適切な専門家としての資格を有する独立的鑑定人による評価、または当該評価に調整を加えたものを用いております。当該評価は、各物件の予想される賃料及び割引率等のインプット情報に基づき主にインカム・アプローチにより算定されており、当該不動産の所在する国の評価基準に基づいております。

## 1株当たり情報に関する注記

1株当たり親会社所有者帰属持分	2,452円81銭
基本的1株当たり当期利益(親会社の所有者に帰属)	238円33銭
希薄化後1株当たり当期利益(親会社の所有者に帰属)	238円15銭

## 重要な後発事象に関する注記

該当事項はありません。

## その他の注記

(Intercontinental Terminals Companyにおける火災事故)

2019年3月17日(米国時間)、当社の在米国100%連結子会社Intercontinental Terminals Company LLC(以下ITC)がテキサス州ヒューストン市近郊に保有するDeer Parkタンクターミナル構内で出火、242基のタンクのうち15基のタンク及び付帯設備が全壊ないし一部損壊しました。火災は3月22日(米国時間)には完全に鎮火しております。ITCは、火災発生直後から関係当局と協力しながら対応しております。事故原因は引き続き調査中です。

当連結会計年度において、消火費用や周辺浄化費用等を含む本事故への対応費用の既発生分及び将来発生すると現時点で合理的に見積った金額から、現時点で支払われることがほぼ確実な保険金のみを控除した20,600百万円の費用を雑損益に計上しております。

なお、ITCは、本件に関連して複数の訴訟等を受けておりますが、いずれも初期段階であり、現時点において、訴訟等の結果が、連結財政状態、連結経営成績及び連結キャッシュ・フローの状況に重大な影響を及ぼすものとは想定しておりません。

## 計算書類

### 株主資本等変動計算書

第100期(2018年4月1日～2019年3月31日)

(単位：百万円)

科 目	株主資本							
	資本金	資本剰余金		利益準備金	利益剰余金			利益剰余金 合 計
		資本準備金	資本剰余金 合 計		その他利益剰余金			
				別途積立金	特別積立金	繰越利益 剰 余 金		
当期首残高	341,481	367,758	367,758	27,745	176,851	1,619	923,202	1,129,419
当期変動額								
剰余金の配当							△ 139,038	△ 139,038
当期純利益							219,977	219,977
自己株式の取得								
自己株式の処分							△ 207	△ 207
自己株式の消却							△ 96,467	△ 96,467
ストックオプション 発行に伴う報酬費用								
株主資本以外の項目の 当期変動額(純額)								
当期変動額合計	-	-	-	-	-	-	△ 15,735	△ 15,735
当期末残高	341,481	367,758	367,758	27,745	176,851	1,619	907,467	1,113,684

科 目	株主資本		評価・換算差額等			新株予約権	純資産 合 計
	自己株式	株主資本 合 計	その他有価 証券評価 差 額 金	繰延ヘッジ 損 益	評価・換算 差額等合計		
当期首残高	△ 104,363	1,734,295	338,451	△ 89,927	248,524	777	1,983,597
当期変動額							
剰余金の配当		△ 139,038					△ 139,038
当期純利益		219,977					219,977
自己株式の取得	△ 16	△ 16					△ 16
自己株式の処分	359	151				△ 151	0
自己株式の消却	96,467	-					-
ストックオプション 発行に伴う報酬費用						231	231
株主資本以外の項目の 当期変動額(純額)			3,805	△ 17,960	△ 14,155		△ 14,155
当期変動額合計	96,809	81,074	3,805	△ 17,960	△ 14,155	79	66,999
当期末残高	△ 7,553	1,815,370	342,256	△ 107,887	234,369	857	2,050,597

第99期(ご参考)(2017年4月1日～2018年3月31日)

(単位：百万円)

科 目	株主資本							
	資本金	資本剰余金		利益準備金	利益剰余金			利益剰余金 合 計
		資本準備金	資本剰余金 合 計		その他利益剰余金			
				別途積立金	特別積立金	繰越利益 剰 余 金		
当期首残高	341,481	367,758	367,758	27,745	176,851	1,619	669,036	875,253
当期変動額								
剰余金の配当							△ 105,844	△ 105,844
当期純利益							360,040	360,040
自己株式の取得								
自己株式の処分							△ 29	△ 29
ストックオプション 発行に伴う報酬費用								
株主資本以外の項目の 当期変動額(純額)								
当期変動額合計	-	-	-	-	-	-	254,166	254,166
当期末残高	341,481	367,758	367,758	27,745	176,851	1,619	923,202	1,129,419

科 目	株主資本		評価・換算差額等			新株予約権	純資産 合 計
	自己株式	株主資本 合 計	その他有価 証券評価 差 額 金	繰延ヘッジ 損 益	評価・換算 差額等合計		
当期首残高	△ 54,401	1,530,091	221,230	△ 120,141	101,088	559	1,631,739
当期変動額							
剰余金の配当		△ 105,844					△ 105,844
当期純利益		360,040					360,040
自己株式の取得	△ 50,021	△ 50,021					△ 50,021
自己株式の処分	59	30				△ 29	1
ストックオプション 発行に伴う報酬費用						247	247
株主資本以外の項目の 当期変動額(純額)			117,220	30,214	147,435		147,435
当期変動額合計	△ 49,961	204,204	117,220	30,214	147,435	218	351,857
当期末残高	△ 104,363	1,734,295	338,451	△ 89,927	248,524	777	1,983,597



## 個別注記表(第100期)

### 重要な会計方針に係る事項に関する注記

#### 1. 有価証券の評価基準及び評価方法

売買目的有価証券……………時価法(売却原価は移動平均法により算定)  
満期保有目的有価証券……………償却原価法(定額法)  
子会社株式及び関連会社株式…移動平均法による原価法  
その他有価証券  
時価のあるもの……………期末日の市場価格等に基づく時価法(評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定)  
時価のないもの……………移動平均法による原価法  
売買目的有価証券以外の有価証券のうち、時価または実質価額が期末日直前の貸借対照表価額と比較して著しく下落している銘柄については、回復可能性の判定を行った上で、評価減を実施しております。

#### 2. デリバティブの評価基準及び評価方法

時価法によっております。

#### 3. 棚卸資産の評価基準及び評価方法

個別法(一部の商品については移動平均法または先入先出法)による原価法を採用しております。なお、貸借対照表価額は収益性の低下による簿価切下げの方法により算定しております。トレーディング目的で保有する棚卸資産は時価法によっております。

#### 4. 固定資産の減価償却の方法

有形固定資産……………定率法  
但し、1998年4月1日以降に取得した建物(建物附属設備を除く)並びに2016年4月1日以降に取得した建物附属設備及び構築物については、定額法を採用しております。なお、主な資産の耐用年数は以下のとおりです。  
賃貸用固定資産 : 5～50年  
建物及び構築物 : 2～50年  
無形固定資産……………定額法  
なお、自社利用のソフトウェアについては、利用可能期間(原則として5年)に基づく定額法によっております。  
リース資産については、固定資産の各勘定科目に含め、リース期間を耐用年数とする定額法によっております。

#### 5. 引当金の計上基準

貸倒引当金……………債権の貸倒れによる損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、特定の債権については個別に回収可能性を勘案し、回収不能見込額を計上しております。  
退職給付引当金……………従業員の退職給付に備えるため、当事業年度末における企業年金基金制度等に係る退職給付債務及び年金資産の見込額に基づき計上しております。退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当事業年度末までの期間に帰属させる方法については、給付算定式基準によっております。過去勤務費用については、平均残存勤務期間内の一定の年数(7年間)で按分した額を制度改訂の期から毎期費用処理することにしております。また、数理計算上の差異については、平均残存勤務期間内の一定の年数(7年間)で按分した額を発生の翌期から毎期費用処理することにしております。  
なお、退職給付に係る未認識数理計算上の差異及び未認識過去勤務費用に対応する部分を除いた退職給付債務と年金資産の差額を、退職給付引当金または長期前払費用(「投資その他の資産」の「その他」)として貸借対照表に計上しております。  
債務保証等損失引当金……………子会社等に対する債務保証等の偶発債務による損失に備えるため、被保証先の財政状態等を勘案の上、必要と認められる額を計上しております。

#### 6. 外貨建の資産及び負債の本邦通貨への換算基準

外貨建金銭債権債務は、期末日の直物為替相場により円貨に換算し、換算差額は損益として処理しております。

#### 7. ヘッジ会計の方法

ヘッジ会計の方法……………ヘッジ会計の適用要件を満たすものについては、繰延ヘッジ処理によっております。但し、その他有価証券をヘッジ対象とするものについては、時価ヘッジ処理によっております。なお、外貨建金銭債権債務をヘッジ対象とする為替予約等については、金融商品に関する会計基準による原則的処理によっております。また、金利スワップのうち所定の要件を満たすものについては、その金銭受払純額等をヘッジ対象とする資産または負債に係る利息に加減して処理しております。  
ヘッジ手段とヘッジ対象……………外貨建債権債務、在外子会社等に対する投資への持分及び将来の輸出入取引等に伴う為替レート変動のリスクを回避する目的で、為替予約等の通貨関連のデリバティブ取引

及び外貨建借入を行っており、また事業活動に伴う金利レート変動のリスクを回避する目的で、金利スワップ取引等の金利関連のデリバティブ取引を行っております。商品については、棚卸資産及び売買契約等に係る価格変動リスクを回避する目的で、商品関連のデリバティブ取引を行っております。

ヘッジ方針……………事業活動に伴って生じる為替・金利・商品に係る相場変動のリスクは、トレーディング取引に係るものを除き、社内リスク管理方針に基づき、リスクの特性に応じてデリバティブ取引及び外貨建借入を利用して、ヘッジしております。

ヘッジ有効性評価の方法……………個々の取引の特性に応じて策定されたヘッジ有効性の評価の方法により、ヘッジ対象とヘッジ手段を対応させた上で有効性を評価しております。

## 8. その他計算書類作成のための重要な事項

消費税及び地方消費税の会計処理……………税抜方式によっております。

連結納税制度の適用……………連結納税制度を適用しております。

## 貸借対照表に関する注記

### 1. 担保に供している資産及び担保に係る債務

(単位：百万円)

担保に供している資産		内 訳		
種 類	期末帳簿価額	長期借入金 のために(注1)	取引保証金等 の代用として	保証債務のために
売 掛 金	188	188	—	—
投資有価証券、関係 会社株式及び出資金	155,349	—	3,337	152,012
そ の 他(注3)	15,114	—	15,114	—
合 計	170,651	188	18,451	152,012

(注1) 長期借入金残高64百万円に対応しております。

(注2) 上記のほか、借入約款において担保物件を特定せず借入先より請求のあった際に直ちに担保を差し入れる旨の条項のある借入金は139,968百万円です。

(注3) 主に営業取引やデリバティブ取引に係る差入保証金及び敷金です。

### 2. 自由処分権を有する担保受入金融資産 3,889百万円

### 3. 有形固定資産の減価償却累計額 34,221百万円

### 4. 偶発債務

(1) 保証債務

(単位：百万円)

被 保 証 人	保証債務残高(注1)
1. 取引先等の銀行借入及び仕入債務等に対する保証	
Mitsui & Co. Cameron LNG Sales, LLC	772,615
Oriente Copper Netherlands B.V.	197,205
Mitsui & Co. Energy Trading Singapore Pte. Ltd.	142,062
Cameron LNG, LLC	122,374
Lepta Shipping Co., Ltd.	111,383
Mitsui E&P Italia A S.r.l.	84,162
MEPAU A Pty Ltd.	74,308
Energia Sustentavel do Brasil S.A.	62,354
Corredor Logistico Integrado de Nacala S.A.	61,384
M&T Aviation Finance (Ireland) Ltd.	60,880
その他 247社	1,458,395
小 計(注2)	3,147,126
2. 海外現地法人の銀行借入等に対する保証	
中東三井物産バハレン会社	347,663
ノルウェー三井物産株式会社	16,374
その他 海外現地法人 10社	12,917
小 計	376,955
合 計	3,524,081

(注1) 複数の保証人がいる連帯保証及び他社が再保証している債務保証については、当社の負担となる額を記載しております。

(注2) 保証差入有価証券等に基づくもの150,681百万円を含めております。

(注3) 区分掲記されている会社は主に関係会社であり、受取保証料については取引実態を勘案の上、個別に取極めを行っております。

(2) 割引手形残高 86,086百万円

なお、輸出貿易信用状取引における銀行間決済未済の銀行手形買取残高を手形割引に準ずるものとして含めており、その金額は80,920百万円です。

## 5. 関係会社に対する金銭債権及び金銭債務

短期金銭債権	539,407百万円	長期金銭債権	241,930百万円
短期金銭債務	434,014百万円	長期金銭債務	50,437百万円

## 損益計算書に関する注記

### 1. 関係会社との取引高

営業取引による取引高	
売上高	891,260百万円
仕入高	700,081百万円
営業取引以外の取引による取引高	467,204百万円

### 2. 投資有価証券・関係会社株式評価損

当事業年度に計上した投資有価証券・関係会社株式評価損90,328百万円のうち、主なものは以下のとおりです。  
カタールのLNG事業関連 43,428百万円

## 株主資本等変動計算書に関する注記

当事業年度末日における自己株式数  
普通株式 4,241,441株

## 税効果会計に関する注記

繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

繰延税金資産	(百万円)
貸倒引当金	21,266
債務保証等損失引当金	6,031
投資有価証券・関係会社株式等	266,152
固定資産評価損・減損損失	5,736
未払賞与	9,236
退職年金費用	7,820
繰延ヘッジ損益	33,445
繰越欠損金(注)	86,062
その他	12,349
繰延税金資産小計	448,097
評価性引当額	△ 448,097
繰延税金資産合計	—
繰延税金負債	
その他有価証券評価差額金	113,751
その他	319
繰延税金負債合計	114,070
繰延税金負債の純額	114,070

(注) 繰越欠損金に係る繰延税金資産の失効期限は5年以内が47,130百万円、5年超10年以内が38,932百万円です。

## 関連当事者との取引に関する注記

会社等の名称：三井物産都市開発㈱  
種類：子会社  
議決権の所有割合：直接 100%  
関連当事者との関係：役員の兼任、資金の供与  
取引の内容：資金の貸付  
取引金額：70,926百万円  
期末残高：短期貸付金22,946百万円、長期貸付金29,500百万円  
取引条件及び取引条件の決定方針等：  
同社に対する資金の貸付条件については、市場金利を勘案し決定しております。

会社等の名称：三井石油開発㈱  
種類：子会社  
議決権の所有割合：直接 74.261%  
関連当事者との関係：役員の兼任、資金の預り  
取引の内容：資金の預り  
取引金額：137,113百万円  
期末残高：200,891百万円  
取引条件及び取引条件の決定方針等：  
同社からの資金の預り条件については、市場金利を勘案し決定しております。

会社等の名称：パイトン電力投資㈱  
種類：子会社  
議決権の所有割合：直接 100%  
関連当事者との関係：役員の兼任、資金の預り  
取引の内容：資金の預り  
取引金額：63,318百万円  
期末残高：68,865百万円  
取引条件及び取引条件の決定方針等：  
同社からの資金の預り条件については、市場金利を勘案し決定しております。

なお、主に生活産業セグメントに属する子会社及び関連会社への債務保証等に対して、19,454百万円の債務保証等損失引当金を計上しております。また、当事業年度における債務保証等損失引当金戻入額は31,735百万円です(当社からの融資に伴う関係会社等貸倒引当金繰入額への振替額19,731百万円を含む)。

## 1株当たり情報に関する注記

1株当たり純資産額	1,179円79銭
1株当たり当期純利益	126円57銭
潜在株式調整後1株当たり当期純利益	126円48銭